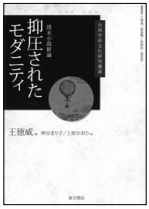
百年を跨いで照らしあう二つの「世紀末的輝き」

石井　剛



王徳威著
神谷まり子・上原かおり訳
抑圧されたモダニティ
清末小説新論

A5判　528頁
東方書店
［本体 5,000円＋税］

ニューヨークのマンハッタンの街角でふしぎな既視感を抱いたことのある人はわたしだけではないだろう。途方もなく無秩序で人いきれのする雑踏、露店販売のカートから漂う煙のスパイシーな臭気、路傍を濡らす正体不明の液体、そして天を射貫くように怪しげな輝きを放つきらびやかなネオンサイン……。そう、それはまるでカーニバルのように、バブルの狂騒を奏でながら急速な発展を遂げた中国の巨大都市で感じる光景ではないか。それらは人々の欲望と虚栄心を吸い上げながらシュールな頽廃に満ちた世紀末的輝きを放っている。「世紀末的輝き」――Fin-de-Siècle Splendor、それはまさに、このたび翻訳出版相成った本書の英文版オリジナルにつけられたタイトルに他ならない。

オリジナルの出版は今を遡ることちょうど二〇年前の一九九七年。この年、香港が中国に返還され、七月一日の返還セレモニーでは、江沢民が得意満面の笑顔で「香港の明日はもっとよくなる（香港明天更好）」という自筆の揮毫を披露した。国有企業改革が急速化の道をたどり、「下崗」労働者の急増が社会問題化しようとしていたころのことである。統制経済から市場経済へ（もしくは社会主義から資本主義へ）と経済体制が大きな転換を迎えていたのもこのころであり、さまざまな問題はあっても経済がよくなり、いずれよい世の中が訪れるとまだ多くの人々が信じることのできた時代であった。

英文版出版当時、著者の王徳威（David Der-wei Wang）はニューヨークのコロンビア大学に勤務していた。花柳界や江湖の人々が活躍し、もしくはグロテスクなカーニヴァル的世界や奇怪なサイエンス・ファンタジーなどのように、猥雑さ

にあふれた世界を描く「不真面目な（frivolous）」（本書二二頁）作家たちの作品群のなかに清末の「世紀末的輝き」を見いだした著者のインスピレーションにも、マンハッタンの喧噪はどこかで作用していたのではないかとふと思う。同時に本書が醸し出す「抑圧されたモダニティ」解放のオプティミズムは、昇り龍のような中国を横目に見ながら、世紀末の妖しさに光を添えていたのではないだろうかとも。

ところで、同書には中文版（宋偉杰訳、台北版二〇〇三年、北京版二〇〇五年）もあり、そのうち著者自らが翻訳した序（導論）には、「沒有晚清，何來五四？」（清末なくして五四はいずこから？）というタイトルが付されている。同書が中国語圏で広くその名を知られるようになったのは、このキャッチーな序論のタイトルに負うところも大きいであろう。著者は五四新文化運動時期に生じた「文学革命」を中国文学における近代の始まりとみる従来の見方に異を唱える。それに代わって、太平天国の乱から清朝崩壊まで（一八四九～一九一一年）の清朝末期に登場した小説にもう一つの近代を見いだそうというのが著者の本書におけるプロジェクトである。しかし、それは五四新文化運動パラダイムにおいてモダニティの内容と目されている、例えば陳独秀の「プロレタリア文学、写実文学、革命文学」や魯迅の「精神治療」などのような、「文学における道徳の役割」の強調（以上三五頁）が含まれた進化と革命の単線的発展観の起源を清末まで遡って確認しようとしているのではない。また、そのような近代観を否定するのでもない。本書で著者が試みたのは、これらだけが中国文学のモダニティなのではないと示すことであった。著者はカリネスクに従いながら、モダニティとは「新しく、革新的であること」（五頁）であると定義づける。西洋近代文明との邂逅に触発されて不可逆的な時間意識を持たざるを得なくなった清代末期は、まぎれもなくモダンなのであり、そうした時代背景のもとで生まれた清末小説もまた、近代的たることを積極的に引き受けていった。しかし、それらが体現していた近代性は、五四的モダニティが中国文学史における主流な近代解釈を構成していたがために見落とされてしまっていた。それを著者は「抑圧されたモダニティ」と呼ぶのである。

本書の書名と同タイトルであることが示しているとおり、第一章は全体に対する著者自身による解題と見なしてもよい。「抑圧されたモダニティ」の系譜を掘り起こすこと、つまり、これまで近代だと思われていたもの以外にも「近代」はあるのだと主張することが必要なのは、著者において、近代とはそもそも「様々な言語と人間の複雑な交流の産物」（二六頁）だからである。それはなにがしかの目的を目指して

まっすぐ進むものではなく、さまざまな声を響かせながら、ひとつひとつの声がさまざまな可能性の種子をまき続ける、多声的な世界なのだ（二九頁）。バフチンやデリダなどの理論が時に明示的に、時に断りなく散りばめられている第一章は、中国文学研究界きっての理論の使い手であるとも言われる著者ならではの刺激的なディスコースである。

以上のような目論見で著者が掘り起こしたのが、第二章から第五章までの各章を構成する四つのジャンル――花柳小説（狎邪小説）、俠義公案小説、グロテスクな暴露小説（醜怪譴責小説）、サイエンス・ファンタジー（科幻奇譚）である。これらの中には、五四期の批評によって取り上げられた作品も含まれているが、五四の作家や批評家たちは、清末モダニティのうちに存在する、彼らにとって必ずしも好ましくはない部分を否定し、それらを浄化することによって文学的近代のプロジェクトを遂行してきたのだと著者は言う（二七頁）。著者によれば、そうして切り捨てられたものたちは頽廃的で、発展の道すじを螺旋のようにくねらせ、過剰な情感に溢れ、そして模倣やパロディに満ちている。

陳独秀が「文学革命論」を発表したのが一九一七年。それは、五四的近代の幕開けであると同時に、清末のこうした小説群の価値が否定される歴史の始まりだった。それからちょうど八〇年を経て、著者の手でようやく「抑圧」から解き放たれた数々の作品には、世紀末ならではの猥雑さとデカダンスに満ちあふれた妖しい物語がひしめいている。男性の同性愛を描きながら、儒教的ジェンダー規範の矛盾がカーニヴァル的に戯画化された『品花宝鑑』、中国初の近代都市上海の妓楼的公共空間に蠢く欲望と美徳を写実的な筆致で描いた『海上花列伝』、妓女でありながら（妓女であったがゆえにかもしれぬが）、義和団事件後の和平交渉に大きな役割を果たしたと言われる賽金花を描いた『孽海花』や『九尾亀』（以上第二章）、『水滸伝』の続作としてこの「政権顛覆の意図で有名な小説」に「皇帝への忠節」を移植しつつ（一七〇頁）、それでいてラディカルに破壊的に「忠」と「義」の多義性を描き出した『蕩寇志』、義俠心にかられた英雄たちの物語を通じて、近代的俠客としての「文俠」（刀ではなく筆の力で個人と社会を守ろうとする俠客）のイメージ（一九六頁）を提示した『老残遊記』や『三俠五義』（以上第三章）、清末社会のグロテスクな不条理を暴露的に描写した『二十年目睹之怪現状』（第四章）、康有為的大同ユートピアの反復とも読める『新石頭記』、エキゾチックなものへの想像が気球を使った月への入植という果たされない企ての物語に転化した『月球殖民地小説』、理想的な政治が行われていたとされる古代中国の夢を未来に託した「ノスタルジックな予見」

の小説『新中国未来記』（以上第五章）などなど。

続く第六章は前章までとは趣を変えて、一九八〇年代以降の当代小説を対象にしながら、もう一つの「世紀末」における「抑圧されたモダニティ」の再浮上が論じられる。そこでは、「五四」的近代のナラティヴが有効性を失いつつあると示すこと、そしてその隘路を打開するための試みが本書の隠れた意図であったことが明かされる。言いかえれば、一見本書の主題からは外れているはずの当代小説こそが、実は著者のプロジェクトの出発点を示しているのではないかと覚しいのである。それは、「清末の先例」というサブタイトルとともに、「「五四」前と「六四」後の隠れた対話」（四一四頁）への注意を喚起するという本章の目的にも表現されているだろう。当代小説が直面していたのは、「五四」文学のリアリズムが恐怖や暴力を共犯的に助長していたがために、「もはや中国史に刻み込まれた恐怖や暴力をとらえることはできない」（四四四頁）のだという時代の現実である。それは同時に、「五四」以降の歴史とは異なった近代のやり直しへの著者の淡い期待であったかもしれない。サイノフォーン・スタディーズ（華語語系研究）に注力する著者の近年の研究を予示するかのように、第六章では中国大陸だけでなく、台湾、香港、海外の作品にも触れられているのはその現れだろう。さらに付言するならば、著者の編集によって二〇一七年の春に出版されたばかりの『新近代中国文学史』（*A New Literary History of Modern China*、ハーヴァード大学出版社）は、多くの声が互いを抑圧することなく響き合う、バフチンの「ヘテログロシア」的モダニティの世界を二〇年前よりもずっと大きなスケールで描き出した作品である。こちらも中国語版の翻訳が進んでいると伝え聞くが、著者の近代観と文学観が結晶した作品として多くの読者を誘っている。

それにしても、「抑圧されたモダニティ」の解放への期待は二一世紀を迎えて成就したのだろうか。そう疑問を呈しておくことは、二〇年後に本書を手にするわたしたちにとって、執筆当時の著者への遅延された応答のあるべき姿としても無意味ではなかろう。それはまた、本書の余白に潜んでいるであろう別の主題について思いをめぐらしてみることでもある。評者なりにこのことを考えてみた際にふと気づいたことを本稿の最後に書き留めておきたい。それは、「土」とモダニティの複雑な関係である。本書がすくい上げたのが妓女や俠客の世界の物語であるとすれば、その脱中心的で流動的なさまはあたかも水を思わせる（「江湖」なる語を連想すればよいだろう）。本書のモダニティとは淀むことなく流れ続ける水の近代なのだ。一方で、五四的モダニティは、「土」に生き

死にする民の主体化を目指し、やがて内側からの暴力とともに色褪せていく。だが、それらが八〇年代以降の小説に受けつがれなかったはずはなかろう。言いかえれば、当代小説は、清末的「世紀末」の再現であると同時に、五四以降の「土」のモダニティをもうちに取り入れているのではないか。そう考えてみると、莫言や張承志、さらには小説ではないが、賈樟柯の映画に見られるような「郷土」的主題が、単なるノスタルジーの表出とだけではとても語り尽くせない複雑さと豊かさを湛えていることに自然想到することだろう。そのことを評者なりに受けとめてみると、これらの作品に描かれているのは、「俠」のヒロイズムと相補いながら、ひび割れたモダンの空隙を射貫くような不穏さを醸す人々の世界である。二一世紀に入ってからの文学的風景が、ある種、より「世紀末」的なグロテスクさを湛えているとしたら、この不穏さがその一端にあるのではないか。それはもしかすると二〇年前にはまだ抱かれていたようなオプティミズムとは異質の輝きであり、しかもまた、「壮麗さ」を表すsplendorがさほど似つかわしくはないような土臭い、鈍い輝きなのかも知れない。

マンハッタンは本書英文版の出版から四年後に誰もが予期し得なかった悲劇――9・11テロに見舞われる。それは、今日にまで続く混沌と不安の始まりであった。中国社会もまた世界史の大きなうねりから自由ではない。世界的なポピュリズムと反知性主義の跋扈にあえぐ今日のわたしたちにとって、「土」とモダニティの曖昧な関係こそが危機的な問題なのではないか。原書出版から二〇年、そして五四「文学革命」のちょうど百年後に本書を手にしたわたしたちには、そうしたことを思いながら本書の行間を豊かに想像することが求められているようにも感じるが、もはや紙幅は尽きている。稿を改めてまた考えてみたい。

（いしい・つよし　東京大学）

INFORMATION

台湾学術文化研究叢書（東方書店刊）

『抑圧されたモダニティ　清末小説新論』
王德威著／神谷まり子・上原かおり訳
A5判　五二八頁　本体五、〇〇〇円

『フェイク タイワン
偽りの台湾から偽りのグローバリゼーションへ』
張小虹著／橋本恭子訳
A5判　三〇四頁　本体三、〇〇〇円

『族群　現代台湾のエスニック・イマジネーション』
王甫昌著／松葉隼・洪郁如訳
A5判　一九二頁　本体二、五〇〇円